

## 第6章 家内奴隸

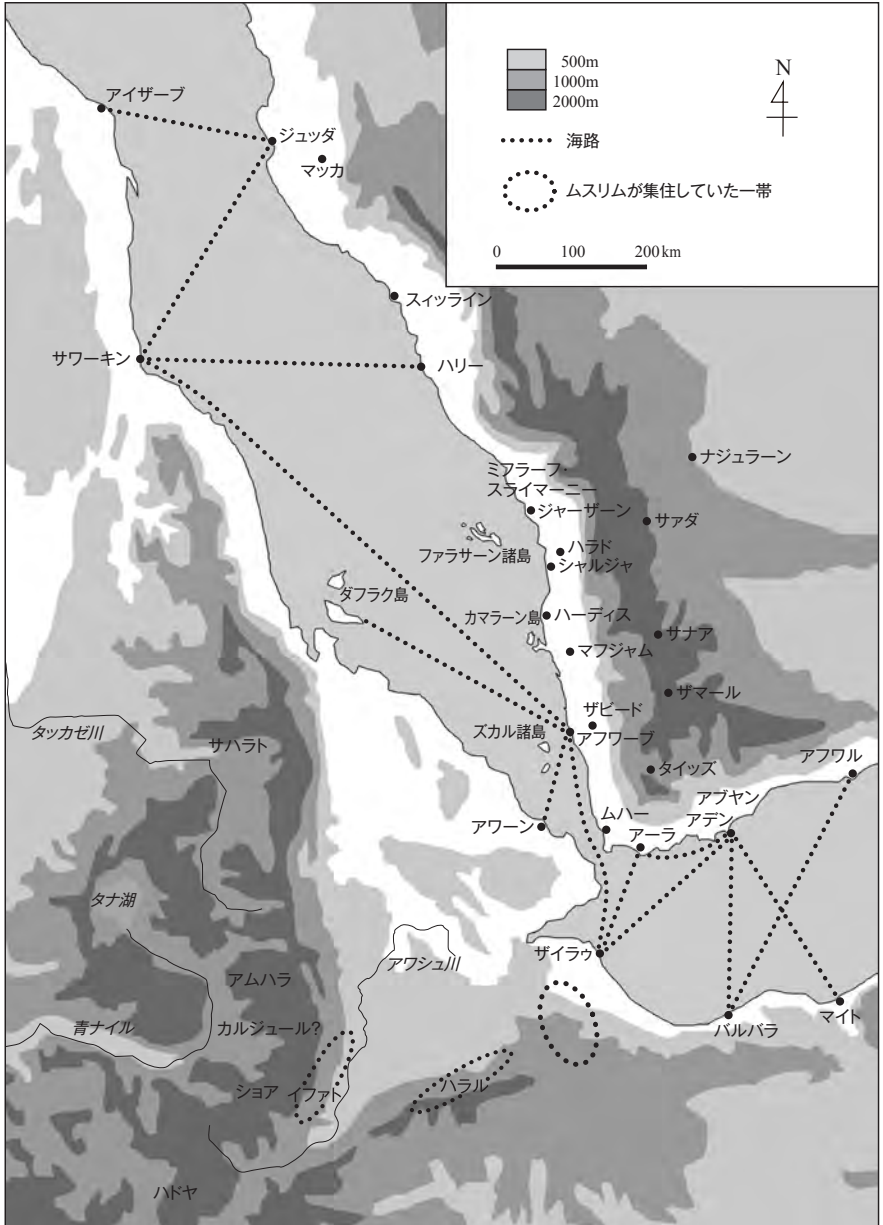
### はじめに

前章で見たように、宮廷への食材供給や宮廷からの食材分配においては、様々な組織や人々が活躍していた。ここでは、書記などの職に加えて、アブドやハーディム、ジャーリヤ、グラーム、タワーシーといった奴隸身分を指すと一般に言われる人々が働いていたことが、『知識の光』所収の関連記事より窺い知れる。ラスール朝宮廷において家内労働に従事した奴隸に関しては、他地域の家内奴隸の研究と同様に、軍事奴隸と比すればこれまで十分に検討されていない。

そこで本章では、『知識の光』に見られる家内奴隸と思しき人々について、相対的に多くの情報が残されている出自や収入に着目して検討する。記事中で併記される軍事奴隸マムルークにも触れつつ、一三世紀のラスール朝宮廷食材に関わった人々の一端を叙述する。イスラーム世界の境域に位置したイエメンの家内奴隸に、他地域と比した場合にどのような一般性あるいは特殊性が見られるのだろうか。この分析は、ラスール朝の王権を支えた一要素を具体的に明らかにすると同時に、中世イスラーム世界における奴隸研究へひとつの事例を提供するものである。

なお、奴隸や自由人の社会的な実態としての区別は曖昧なもので、奴隸とは何か、誰が奴隸であったのかといっ

地図5 ラスール朝期の紅海沿岸部と東アフリカ



\*Tamrat 1977: 141; Vallet 2010: 752, 753; 石川 2009: 7 をもとに筆者作成。

た点を厳密に定義することは、こうした曖昧さを切り捨てることにつながる<sup>2</sup>。実際、第3節で見られるように彼らは給与を得ており、解放奴隷、あるいは、有償解放契約を主人と交わして蓄財の自由などを得た奴隷であった可能性も否定されない。本章では、彼らの法的社会的身分について厳密に追求することは史料の制約上できないが、出自や収入の検討を行うことでその具体像に迫る。

## 1 東アフリカから流入する人々

### (1) アデン港課税品目録に記載される人々——アブド・ハーデーム・ジャーリヤ——

『知識の光』所収のアデン港業務関連記事のうち、イエメンの対岸の東アフリカにおける商業活動に関する断片的な記事は、アブドやジャーリヤ、ハーデームが、他の産物と同様に、銀の重量単位であるウキーヤでその価値を計られたうえで織物 (bazz) との物々交換 (mugayada) によって取引されていたことを伝える<sup>3</sup>。彼らはいずれも加算法によって、最上級 (al) と中間 (wasai)、最下級 (dam) に区分されていた<sup>4</sup>。アブドとジャーリヤの取引価値はほぼ等しく、最上級は二〇ウキーヤ、中間は一四〜一六ウキーヤ、最下級は一〇〜一二ウキーヤであった。それに対して、ハーデームの取引価値はアブドやジャーリヤの三倍から五倍に達しており、最上級は六〇〜一〇〇ウキーヤ、中間は五〇〜六〇ウキーヤ、最下級は四〇ウキーヤ以下程度であった。このうち「男であるアブドたち (al-*and al-futū*)」については、ジズル族 (al-jizn) やアムハラ族 (al-Amharā)、サハラト族 (al-Saharān) 出身の、純潔のエチオピアの若者 (al-wasīf al-Habashā al-sāhib) がよいとされた<sup>7</sup>。

ハーデームは、先に挙げたようにアブドについて説明する際にあえて「男である」の語が付されること、取引価

格がアブドやジャーリヤより相当に高額であること、第3節で見られるようにラスール家の女性成員のもとで彼らが大勢働いていたことを念頭に置けば、去勢されたアブド、すなわち、去勢者に他ならない。彼らは東アフリカにおいてすでにハーデームであることから、イスラーム世界の境域であるアデン (Ḥaḍramūt, Adan) に入る以前に手術を施されていた。これは、「去勢手術の多くがイスラームの境域の外側で主として不信仰者によって行われていた」というアヤロンの指摘と一致する。輸出港であるザイラウがすでにイスラーム化していたことを踏まえれば、実際の施術場所はザイラウの後背地にあつたと考えられる。

彼らはエチオピアやザンジュ (Zanj) よりザイラウへ輸送されて後、ザイラウから海路アラビア半島へ運ばれた。エチオピアからザイラウへ彼らを輸送するにあたっては、様々な関税や輸送料に加えて、肉やバター油脂などの彼らへの支給品が必要であつた。なお、ヌビア (al-Nubā) 出身の奴隷がイスラーム世界で活躍していたことはよく知られており、『書記官提要』にも記載が見られるもの(後述)、他のラスール朝期の記事にその存在を確認することはできない。またこの時代には、さらに南に位置するモガディシユがインド洋交易港として繁栄しつつあり、奴隷が盛んに積み出されていたとシャムルーフは述べるが、このことを明示する記述はラスール朝史料に見当たらない。その理由としては、ヌビアやモガディシユからの奴隷供給がなかったというよりもむしろ、これらの地域を出立した人々があつたとしてもエチオピアやザンジュ出身の人々とまとめて扱われたために史料上に明記されにくいと考える方が妥当だろう。

ザイラウ以外にも、紅海に浮かぶダフラク島もまた、奴隷経由地として機能していた。その歴史は古く、二六六／八七九一八〇年頃にはダフラク島へ運ばれたヌビアやエチオピアの男女の若者五〇〇人ずつに対して課税が行われていたことが、『イエメン史』に記録されている。ダフラク島の支配者(ḥakīm)がラスール朝スルタンヘジャーリヤやアブドを贈ったという記録は、ラスール朝期にもダフラク島が奴隷経由地であり続けたことを示す。